

---

# 消失

あと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
消失

【Nコード】  
N0479R

【作者名】  
あると

【あらすじ】  
結婚するんだ。  
幼なじみが告げた。

(前書き)

後味が悪いです。

女々しいと思う。

二十歳を過ぎた男が枕を涙で濡らしているなんて、他人に知られたら死にたくなる。親にも見せられない。

雅司は枕元のティッシュをつかみ取った。思い切り鼻をかんだ。花粉症でもないのに、ゴミ箱からティッシュが溢れていた。幼なじみの陽子の笑顔を思い出すたびに、ゴミは増えていった。

ひとつ上の彼女が、昨日、恥ずかしそうに告げた言葉を思い出す。

秋にね。結婚するんだ

小学校の頃から密かに思い続けていた女性だった。

告白したことはない。

そんなことをする勇氣はなかった。好きだという気持ちは、昔からずっと変わらなかった。ただ、それ以上の感情があるかということ、自分でもわからなかった。

抱きしめたい。キスをしたいという気持ちは、不思議となかったのだ。

毎年、バレンタインデーになると、チョコをもらっていたし、ホワイトデーにはお返しもしていた。

もちろん、義理だ。少なくとも、陽子からはそうだった。コンビニで売られているチョコばかりだったから。

雅司は、毎年クッキーをあげていた。お菓子好きが高じて、自分で作るようになった。お店で品選びをするよりも、苦労はない。コストも安いし、余れば自分で食べればいいからだ。

クッキーは、義理ではなかった。

昼を過ぎていた。

目が腫れぼったい。理由はどうあれ、この顔も人には見せられない。目蓋に手を当てると、少し熱かった。

「陽子……」

彼女の名前を口にする。自分の耳に入ると、胸が締め付けられた。陽子が誰と結婚するかは知っていた。以前に、彼氏を紹介されていた。三人とも、同じ大学に通っていることもあり、キャンパスで何度か見たことのある学生だった。

知的な顔立ちで、話し方などもしっかりしていた。雅司とは違い、明るい印象だった。引っ込み思案の雅司からすると、まともに目を合わせられない存在だ。部屋にこもってうじうじ考え込んだりしないタイプだろう。

雅司はため息をついて、カーテンを少し開けた。いつまでも思い悩んでいるわけにもいかなかった。

明るい日射しが眩しくて目を閉じた。

「あ」

目を開けたとき、陽子の姿が目に入った。幻ではない。彼女は斜向かいの家に住んでいるのだ。

陽子は、春らしい花柄のチュニックとベージュのパンツ姿で、日傘を差していた。雅司が二階の窓から覗いているとは知らず、駅の方向に歩いていった。

見向きもされなかった。

当たり前だ。覗かれているなんて、考えてもないだろう。

雅司は、陽子の顔を見られただけでもよかったと思おうとした。無理だった。

最近はその女の子らしい服装が目立った。彼氏ができた頃合いからだ。今日もこれからデートだろう。嬉しそうな顔だったからわかる。

陽子の幸せを喜ばなければならぬ。だけど、素直に受け入れられなかった。もやもやした感情が身体の中に詰まっていた。

鼻をかんでも、身体の中のもやもやは出て行かなかった。歯を噛みしめた。痛いほど、噛んだ。

涙が出てきただけだった。

歪んだ視界に、陽子の顔が浮かんでいた。笑顔だった。誰かに向けた笑顔だ。雅司に、ではない。雅司は、ただ笑っている顔しか見たことがなかった。

義理。

そつだ。陽子は、義理の弟を見るような目でしか見てくれない。幼なじみとして、弟のようにしか思われていないのだ。

ああ、そつということが。

自分も、陽子を姉のように思っているのかもしれない。だから、いくら好きでも、抱きしめたり、キスしたいと思わなかったのだ。

でも、結婚すると聞いてから、何かおかしかった。あの彼氏と楽しそうに話している光景を想像しただけで、気分が悪くなった。

姉を取られる弟の気分というものだろうか。

カーテンを閉じた。陽子の姿はすで見えなくなっていた。

雅司は目を閉じて、陽子の顔を思い描いた。

デートの最中にキスしたり、抱き合ったりしているのだろうか。結婚するのだから、当たり前だろう。もしかしたら、セックスも。雅司の脳裏に、陽子の裸が浮かんだ。その身体を貪る男もいた。

見たくない。

暗闇の中で、陽子の喜悦の表情が点っていた。

見たくない。

二人が絡まるように抱き合っていた。

やめてくれ。

音を立てて、重なり合った。

せめて、消えてくれ。

雅司の指が、熱い目蓋に触れた。  
深く、潜り込んだ。

男と女が喜びに震えていた。

義理の兄と、義理の姉。

違う。赤の他人だ。

そう思おうとして、できなかった。

ブチリ ブチリ

引きちぎった。

熱いものが転げ落ちてきた。

激しい痛みで絶叫した。

赤く泣き叫び、濡れた膝に拳を叩きつけた。

グチャ グチャ

糸を引いて垂れた眼球を潰した。

それでも、愛し合う二人の幻影は消えなかった。

雅司は、泣きながら、両手の指を眼窩に突き入れた。  
奥に。  
奥へと。

痺れがやってきて、やがて消え失せた。  
何もかもが、消えてなくなった。

枕がじつとりと濡れていた。

消え失せたものなんて、見向きもされない。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0479r/>

---

消失

2011年5月1日08時41分発行